「大森鉄之助の物語」

滋賀から仏領ニューカレドニア、そしてパリへ

津田　睦美

「大森鉄之助の物語」

滋賀から仏領ニューカレドニア、そしてパリへ

津田　睦美

Name :
TSUDA　Mutsumi

Title :
The Tale of Tetsunosuke Omori: From Shiga to New Caledonia to Paris, France

Summary :
This is the story of Tetsunosuke Omori, who was born in Samegai, Maibara into a family that made “butsudan”(Buddhist shelves).
In 1914, Omori went to New Caledonia to work in the nickel mines as a contract laborer. With the advent of the economic crisis after the WWl, he lost his job and decided to join the French army, moving to France.

はじめに

戦前、滋賀県から仏領ニューカレドニアに契約移民として出稼ぎに渡った人は、仲介役を担った移民会社の記録によるとわずか七九名である［表1］。そのなかで特に私が興味を持ったのは、醒ケ井（米原市）上丹生の木地師の家に生まれた大森鉄之助という人物である。

彼について詳しく知るきっかけになったのは、角田房子氏が、一九六一年に文藝春秋に寄稿した「たんぽぽ鉄之介」というルポルタージュである。当時、角田氏は毎日新聞パリ支局長夫人としてパリに滞在し、第一次世界大戦でフランス義勇兵となった日本人について調べていた。どういうきっかけで知り合ったのかはわからないが、彼女は鉄之助に何度か会って聞いた話をベースにその破天荒な人生を生き生きと描いている。

この話は、後に『さまよう愛国心』（一九六一年文芸春秋新社）という単行本の中におさめられ、彼女が日本の近現代史をあつかうノンフィクション作家として執筆をはじめる、ほぼ最初の仕事だったのではないかと思う。

鉄之助が語る話の信憑性は公文書ではとうてい確認できるよ

うなものではないが、何度も厳しい人生の節目を乗り越えた人ならではの魅力にあふれている。本稿では角田氏のテキストを引用し、醒ケ井からニューカレドニアを経てパリへと足をのばし、ふたつの大戦に翻弄されながら果敢に生きた鉄之助の人生をたどってみたい。

一、滋賀から仏領ニューカレドニアへ――

大森鉄之助は明治二四年（一八九一）四月、滋賀県坂田郡醒ケ井村大字上丹生の木地師の家に生まれた。上丹生は醒ケ井から南に進み、丹生川と宗谷川の交わったところにある地域で、農業には向かないこともあって、山林からとれる木材を原料にして、大工、木挽き、指物、彫刻、仏壇、木地などで生計をたててきた。

木地師であった鉄之助の父、大森留三郎の跡を継いだのは兄の力蔵だ。力蔵には六人の弟子がいて、息子の寅雄（おそらく長男）もそのなかのひとりである［註1］。

一九一二年（大正元年）のある日、日仏両政府のニューカレドニア移民募集のポスターを見て、このどこかわからない国へ行ってみる気になった。なんだか摑みどころのない想像は楽しかったし、「お国のため」とポスターにうたってあればその気になった［註2］。

しかし、鉄之助は出稼ぎに行く前年、兵役検査を受け丙種合格しているので［註3］、移民は兵役逃れだと考えることもできる。

一九一三年二月、鉄之助は長崎港からニューカレドニアに真盛丸で出帆した。日本殖民合資会社を仲介役に、オーフルノー・ド・ヌメア会社と四年契約し、鉱山で坑夫として一日十時間（日の出から日没まで）働くのが条件である。船代はすべて自分持ちだ。船中で、鉄之助は二度医師の診察を受けており、回復に計十五日もかかっている。いずれも医師の診察記録には「麻疹」と記入されている［註4］。

鉄之助が同じ滋賀県出身者と出会ったのは、おそらくこの船上でだろう。それ

表1　滋賀県出身のニューカレドニア契約移民

郡	伊香	浅井	東浅井	神崎	坂田	犬上	愛知	蒲生	高島	計
1910年 琴平丸				2		6		1		9
1913年 真盛丸			5	1	11	6				23
1914年 靖国丸		2			8	4	4		3	21
1914年 彦山丸	1		16		3	6				26
	1	2	21	3	22	22	4	1	3	79

東洋移民合資会社と日本殖民合資会社の移民名簿（外務省外交史料館所蔵）から、津田が作成

以降彼らは県人会を作って互いに助け合っていく。

一ヵ月半を波に揺られ、やがてコネシという港に上陸した。（中略）上陸と同時に木造の小屋が与えられたが、板敷きに毛布一枚で寝る居心地の悪さに期待は裏切られた。（中略）四ヵ月後、鉄之助はコネシから十里程のヤテに移った。（中略）ヤテでは当時としては大掛かりな水力電気の工事が始められ、シナ人、黒人、ジャヴァ人など雑多な人種が集り、日本人も千人を越していた［註5］。

翌一九一四年、二艘の船〔靖国丸と彦山丸〕で滋賀県から四七人がニューカレドニアにやってきた。鉄之助が呼び寄せたわけではないが、彼が故郷へ出した手紙がもとになって渡航の決心をした青年達であった。やがて鉄之助は皆に推されて小ガシラ格になった［註6］。

わずか一年で、鉄之助は鉱山会社の食料品店に勤めるようになり、収入も安定するようになった［註7］。このポストにつけたのは、上役から認められ、フランス語もわかるようになってきた証である。坑夫という肉体労働から解放され、生活はうんと楽になっていたことだろう。

二、第一次世界大戦と外国人義勇兵

一九一四年に第一次世界大戦が勃発する。欧州戦争と呼ばれたこの戦争で、フランスは社会が大きく疲弊し経済的な打撃を受けた。その余波は、遠く離れたフランスの植民地ニューカレドニアにも届き、輸送の手段を失った多くの鉱山が閉山に追い込まれた。そのあおりを受け、出稼ぎにきたばかりの日本人は次々と失業し路頭に迷った。

鉄之助もそういった失業者のひとりで、仕事を求めて首都ヌメアに出ることにした。しばらくヌメア港で荷役の仕事につくが、やがてその仕事もなくなった。いよいよ食べていくことに困ったとき、彼が選んだのはフランスの外国人部隊に入隊し、義勇兵になることだった［註8］。義勇兵になれば、服も食事も寝るところも与えられる。

このときの志願者一一〇名のうち、日本人は一〇一名、鉄之助ら一九一六年に入隊した滋賀出身者は、七名である［註9］。

一同はニューカレドニアで二ヵ月の訓練を受けた後、マルセイユへ向かった。

彼らより先にフランスに入った第一回日本人義勇兵の評判はたいへん悪く、結局フランス軍は彼らを日本に送還した。フランス軍はその教訓から、鉄之助たち第二回義勇兵を戦場に送らず、軍から隔離してブールジュの砲兵工場に送った。その後、鉄之助はサン・ボネというところでアメリカの病院建設の仕事があると聞きつけると、無断でそのままそちらに移り住んでしまった［註10］。

三、パリの料理人

第一次世界大戦が終わった後、〔鉄之助は〕本格的にフランス語を習う気になって、パリに移った。学習院で二〇年間フランス語を教えたというミッシェル・ロボン教授の家の住み込みのコックという職が、彼のパリ生活のふり出しである［註11］。

フランス語が上達すると、今度は日本大使館の仕事でドイツへ派遣された。国際連盟の国籍調査という名目で、鉄之助はそこで事務職についた［註12］。

このあたりから大使館関係者や在留日本人との関わりができてきたのだろう。ドイツからパリに戻った鉄之助は、今度は日本人会に務めた［註13］。

一九二一年、三〇歳のときにマドレーヌというフランス人女性と結婚する。それから間もなく、鉄之助は軍隊脱走の嫌疑で軍事裁判所から呼び出された。ドイツにいたこともマイナスな要因となり、裁判は二年半におよんだ。

「軍服も渡されず、自分の稼いだ賃金で着物も食物も支払う兵隊なんて考えられないじゃありませんか。我が大日本帝国にはそんな珍妙な兵隊はありませんよ、といってやったら裁判長は困った顔をしていました」［註14］

機転を効かした申し立てで、鉄之助は運良く無罪となった。なんでも、かつて長浜市（滋賀県）の弁論大会で一等賞をとったことがあるほど、もともと弁がたつのだった［註15］。

裁判が終わると、フランス料理を学ぶため、鉄之助は日本人会をやめて有名なコルドン・ブルーに二年間通って資格をとった。その資格を利用して、フランス人の邸宅で住み込みコックとして働くようになった。しかし、最初の女主人も、次の女主人も、どちらも大いに問題があり、この仕事を長く続けることはできなかった［註16］。

フランス人の家での住み込みの仕事が続いた後、鉄之助は日本料理屋で働くようになる。

日本料理屋「ときわ」に勤め、この店がつぶれるまで七、八年を過した。「ときわ」時代の鉄之助の思い出には、一九二一年前後の北白川、朝香両宮殿下と、二四年の夏のパリ・オリンピックが一番鮮明に残っている。この二つに通じるものは、彼が骨身惜しまず奉仕した満足感である。パリ・オリンピックでは選手達にリキをつけるために一生懸命に日本食の弁当を作った楽しさだけを覚えている［註17］。

一九三二年「ときわ」がつぶれ、鉄之助は自力で日本料理屋「みやこ」をパリの〝山の手〟十六区のパッシーで始めた。戦前のパリにいた日本人でこの店を知らぬ者はない。パリで一番マシな〝日本料理屋だといわれ、店のほかに大使館の何百人もの仕出しや、戦前の外国で一ばん札ビラを

切った陸海軍武官室の宴会なども多く、大へん繁盛した[註18]。

四、第二次世界大戦下のパリ

一九三九年秋には独仏戦争がはじまり、パリではレジスタンスが激しくなった。日本人の多くがパリを去っていった。戦時中、パリに残っていた日本人は十八名だったといわれる[註19]。

一九四一年に日本軍が真珠湾を攻撃するなか、パリも物騒な様相をおびてくる。

日本の潜水艦がフランスの軍港ブレストにはいるようになったのもこの頃であった。その度に鉄之助は通知を受けて軍港に行き、長い危険な航海を終わった将兵の世話をした[註20]。

パリの一般はひどい食糧不足に悩んでいたが、鉄之助は職業がら楽に闇物資が手にはいった。店は閉めたが、彼は残留日本人の食料かかりとなって買い出しを引受けていた[註21]。

戦争が終わると、また別の問題が出て来た。鉄之助の家は築二〇〇年の古さのため、政府から取り壊し命令が出た。そして政府が用意した十区の場末の小さい住居に妻と移ることになった[註22]。

五、ダゲール通り十一番地

五〇代半ばになった鉄之助は、あいかわらず日本に帰ろうとはしなかった。料理屋を廃業し、今度は額縁屋で勤めるようになる。今までさんざん人の世話をしてきたが、今度は職人として日々額縁に向き合うことを選んだのだ。

もともと木地師の息子であり、仏壇づくりをする職人がいつも周りにいたのだから、額縁の仕事はまさに生来の仕事に戻ってきたということではないか。

鉄之助は角田氏に、「今、額縁に金箔をおくことを勉強しておりますので、それが面白うございましてねえ」と語っている[註23]。

二〇一四年、私は鉄之助の足跡を求めパリに向かった。たいして長くはないダゲール通りは、著名な芸術家も暮らす魅力的な通りである。しかも学生時代にこの近くのギャラリーで見習いをしていた私にとって、ここはなじみ深い下町だった。

なんの準備もしないまま、私はダゲール通りにあるいかにも古そうなT額縁店に飛び込み、「オオモリ」という日本人の額職人の名を聞いたことがないか尋ねてみた。若い店主はとても親切で、目の前で、当時のことを知っているであろう自分の祖母に電話をして私の問いを投げかけてくれた。

すぐに、「ササキという日本人がうちでしばらく働いていて、

その後独立した。たしか彼は交通事故で亡くなった。」という答えが返って来た。「オオモリ」という名前を彼から聞くことはできなかったが、私は、間違いなくこの「ササキ」は鉄之助に近い人物だと確信した。

二〇一六年二月、私は再びパリを訪れた。今度は、友人の協力で、ダゲール十一番地の建物に入ることに成功した。通りに面した扉の内側は、まさに角田氏が書いているとおりの光景だった（写真1）。

この突当たりに近い右側の一軒が今の鉄之助がやとわれている仕事場で、彼は朝八時から夕方六時まで黙々と額縁をけずり続けている。八畳ほどの室には天井から出来上がった額がぶら下がり、仕事台や木材が所狭いまでに置かれて、片隅に小さく坐る鉄之助もゴタゴタと置かれた道具の一つに見える［註24］。

突き当たりのガラス張りの家のインターフォンを鳴らすと、四〇代くらいの男性が出て来て、私達の急な訪問に気持ちよく応えてくれた。室内には、レオナール・フジタがこの場所を描いた絵のコピーが貼ってあった。当然のように、ここが佐々木という日本人の額縁屋だったことを知っていて、レオナール・フジタがよく来ていたことも話してくれた。そしてここで一番古くから暮らしている歴史のM先生（一九四三年生まれ）を紹介してもらった。

あいにく私は帰国しなければならなかったので、友人が代わりに聞き取りをしてくれたところ、M先生は佐々木一家と親しく、鉄之助のことも一九五〇年代に働いていた小柄な日本人として覚えていた。さらに佐々木のひとり娘イザベルが結婚してトゥールーズにいることがわかると、私の友人は早速彼女の連絡先をインターネットで見つけ出した。

私がイザベルにメールを送ると、彼女はすぐに返事をくれた。ちょうど日本に出張するので、日本で会いましょうということになった。偶然にも彼女の滞在先は私の自宅から車で十五分くらいのところだった。

同年三月、私は奈良でイザベルに会った。彼女は鉄之助のことをぼんやりと覚えていた。久しぶりにこんなに父親のことを想い出したこと

写真1 ダゲール11番地、奥が佐々木のアトリエ兼自宅。中央は満開の桜の木。右側にレンガづくりの小屋が大森の作業場だった。（イザベル・ササキ所蔵）

はないと言って、佐々木が経営していた額縁屋のことを話してくれた。佐々木六郎の人生は、鉄之助同様実に興味深いものだった。パリに憧れて集った若い日本人の画家たちを下支えしていたのは、佐々木のような人だったのだと思った。

多少、事実の前後関係が不明な点も残るが、鉄之助の晩年と重なるので、佐々木六郎のことを紹介したい。

佐々木六郎は一九一四年、岩手県生まれ。一九三二年、国の移民政策に賛同し、ひとりでも日本の食いぶちを減らしたいと思い渡仏した。娘のイザベルは、佐々木がフランスである植物学者について園芸を学びたかったと聞いている。その後、画家の下働きなどをするうちに、一転して芸術方面に縁ができていったのだろう。

イザベルによると、佐々木が額縁屋を始めるきっかけになったのは、彼が自分で彫った鯉のレリーフのある額を妻に贈ったところ、妻がそのできの良さに驚き、これを商売にできないかと提案したことが発端らしい。

一九四〇年春、ナチス・ドイツの侵攻が近づくと、佐々木はトラック三台分に積み込んだ松方コレクションの絵画四〇〇点を、パリ郊外に運んで保管する役目を担った［註25］。

一九四二年、佐々木はパリ十六区に小さな額縁屋を開いた。やがてモンパルナスから近いダゲール通り十一番地に本格的な額縁店を開いた［註26］。

同年の日本人会の名簿に載る佐々木と鉄之助の住所はいずれも十六区だ［註27］。ふたりが親しくなるのは自然なことだったろう。コックの仕事をやめた鉄之助に、佐々木が自分の店で働かないかと声をかけたのかもしれない。

それから佐々木は十四区に引っ越し、ダゲール十一番地の奥のガラス張りの家が空くと、それをアトリエ兼自宅として確保、さらに小さな中庭に建つ小屋のNo.2とNo.4を作業場にするため借用した。

角田氏が訪ねた鉄之助の仕事場は、このNo.2の小屋で、その前のスペースには佐々木が植えた桜の木があった（今は切られている）。

ダゲール十一番地には、小さな貸部屋がたくさんあって、いろんな国から来た若い芸術家が集まっていたそうだ。イザベルは、肩寄せ合って暮らす、デンマーク、ロシア、日本、スペイン、アイルランドなどから来た異邦人たちとの日々を懐かしそうに語った。コスモポリタンな芸術の町パリの縮図のようなところだったのだろう。

週末になると、佐々木はきまってパリ郊外の田舎にある別荘に家族と出かけた。写真が好きで、いつもイザベルの写真を撮っていたそうだ。

一九六八年三月、単身別荘に向かった佐々木は交通事故で帰らぬ人となる。父の葬儀に大勢の人が集まったことにイザベルはとても驚き、多くの画家達に額を作ってきた父を誇りに思っ

た。

佐々木の死後、しばらくは妻のシモーヌが額縁屋を続けたが、やがてそれも難しくなった。シモーヌは二〇〇二年に亡くなった。彼女が遺したアドレス帳には鉄之助の名前もあり、角田氏が出会ったときに鉄之助が暮らしていた十区の住所が記入されていた［註28］。

六、郷里への帰還

私は、鉄之助の終焉の地を探していた。つまり彼の墓を探していたのだ。そして、二〇一五年十月、醒ケ井の上丹生を初めて訪れた。このとき、村の墓地で見つけた大森家の墓は、鉄之助の兄嫁りよが昭和四〇年（一九六五）七月に建てたもので、墓には夫婦の名前の他に鉄之助の名前が刻まれていた。結局彼はここに帰ってきたのだろうか。

上丹生には鉄之助の兄、力蔵の家が残っていたが、あいにく誰も住んではいなかった。村では力蔵のことはわかっても、その弟である鉄之助のことを覚えている人には出会えなかった。

ところが、知人の紹介で聞き取りをしたSさんから、力蔵の息子にはフランスに行って帰ってきた人がいたということを教えてもらうことができた。すでに故人となったその人は、血縁でいえば鉄之助の甥にあたる。

隣人たちは何故フランスなのか疑問に思っていたようだが、叔父である鉄之助がいたのだから突飛な話ではない。しかし、その渡航理由が何かを学ぶためだったのか、あるいは鉄之助に会いに行ったのかはまったくわからない［註29］。

この甥は、一九四〇年頃フランスから戻ってから結婚し、しばらく仏壇以外の木製の工芸品を開発しようとしていたようだが、残念なことに早逝した。

鉄之助はフランス人女性と結婚していた。だから、私は当然彼の墓はフランスにあるだろうと思っていたので、醒ケ井の墓石に大森鉄之助の名前が刻印されていたのを見ても、それは単に「名前」を彫ってあるだけだと考えていた。

ところが、イザベルから、自分の父と母はそれぞれの郷里に埋葬されることを望んだと聞いたときに、もしかすると鉄之助もそうだったのかもしれないと思うようになった。確証はないが、長い放浪の末、鉄之助は兄夫婦とともに郷里に眠っている、今はそんなふうに感じるのである。そう考えると、私は、晩年の鉄之助は額縁をつくりながら、結局一度も帰ることのなかった滋賀の郷里、上丹生に想いを馳せていたにちがいない、そんなふうに想像してしまうのだ。

註

［註1］彦根仏壇史編纂委員会編『淡海の手仕事 彦根仏壇』1996 彦根仏壇事業協同組合 130頁（以下『淡海の手仕事』）

［註2］角田房子「たんぽぽ鉄之助」『文藝春秋』一九六一年七月号（以下角田）320頁

［註3］角田320頁

［註4］『日本殖民合資会社認可報告雑件』第一巻 外務省外交史料館所

［註5］角田320—321頁

［註6］角田322頁

［註7］角田322頁

［註8］角田322頁

［註9］Philippe Palombo La présence japonaise en Nouvelle-Calédonie (1890-1960) 2000 ANRTの別冊にある外国人義勇兵の記録簿をまとめた表（Palombo作成）から算出した。

［註10］角田322—324頁

［註11］角田325頁

［註12］角田325頁

［註13］角田325頁

［註14］角田327頁

［註15］角田326—327頁

［註16］角田328—329頁

［註17］角田329頁

［註18］角田330頁

［註19］Marchesseau氏

［註20］角田330頁

［註21］角田330頁

［註22］角田331頁

［註23］角田332頁

［註24］角田331—332頁

［註25］尾崎特派員「滞仏三三年の日本人」『読売新聞（ヨミダス歴史館）』一九六六年二月二四日（以下、『読売新聞』）読売新聞ではパリ郊外とあるが、イザベルはコレクションをノルマンディーの農家に隠したと叔父から聞いている。松方コレクションは、ナチスからは守ることができたものの、敗戦国の資産として戦後フランスが接収した。一九五一年サンフランシスコ講和会議のときに、吉田茂首相が仏外務大臣と交渉し、美術館の建設を条件に一部が返還された。

［註26］『読売新聞』

［註27］9 rue Alfred Bruneau（十六区）

［註28］12 écluse saint Martin Cité Jacob（十区）

［註29］『淡海の手仕事』128頁には、一九二六年にパリで開催された万国美術工芸博覧会に、上丹生の森光太郎の木彫工芸品が入選したとあるので、筆者は力蔵の息子の渡仏がそれに何らかの関係があって渡仏した可能性もあると考える。

参考文献

・彦根仏壇史編纂委員会編『淡海の手仕事 彦根仏壇』１９９６ 彦根仏壇事業協同組合
・角田房子「たんぽぽ鉄之助」『文藝春秋』一九六一年七月号
・津田睦美、研究ノート「第一次世界大戦における仏領ニューカレドニアの日本人義勇兵」『文化誌『近江学』第６号』二〇一四年
・尾崎特派員「滞仏三三年の日本人」『読売新聞（ヨミダス歴史館）』一九六六年二月二四日
・Philippe Palombo La présence japonaise en Nouvelle-Calédonie (1890-1960) 2000 ANRT

調査協力

・Vincent Romagny
・Isabelle Sasaki
・在フランス日本人会

成安造形大学附属近江学研究所紀要　第６号

発行日　平成29年３月24日

発　行　学校法人京都成安学園　成安造形大学　附属近江学研究所
〒520-0248　滋賀県大津市仰木の里東４-３-１
電話　077-574-2118

発行者　西久松吉雄

編　集　成安造形大学附属近江学研究所

印刷所　宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2016

ISSN 2186-6937